

学ぶこと自体への欲求に支えられた現職保育者の学び

— 社会人プログラム「現代保育課題研究」の受講生へのインタビュー調査から —

児玉理紗
(大学教員)

はじめに

近年、保育者の専門性向上や保育の質向上に関する活発な議論に伴い、現職研修の機会の拡大や研修内容の充実が求められている。一九八〇年代後半、森上史朗によって提唱された保育カンファレンスは、園内研修の一環として各園で取り入れられてきた。これまでのカンファレンスの議論では、保育者の力量形成や問題解決の機会としてカンファレンスがとらえられており、熟練保育者や新人保育者を含めた参加者全員の対等性を確保するな

どの方法論に研究の焦点が当てられてきた。^{注1}

しかし、今回筆者がインタビューを行ったお茶の水女子大学社会人プログラムの「現代保育課題研究」の受講生の学びは、単に保育者としての力量形成や即時に応用可能な問題解決的な学びとは異なるものであった。

本稿では、受講生のインタビュー調査結果から、大人の学習者としての保育者の学びを成人学習の視点を援用しながら報告する。

研究の概要

「現代保育課題研究」(二〇一一・二〇一二)

児玉理紗(こだまりさ)
比治山大学短期大学部幼児教育科。

度実施)の受講生十四名に一对一の半構造化

インタビューを行った。「現代保育課題研究」

とはお茶の水女子大学社会人プログラム内の

科目であり、「受講生自身の関心をもとに、

乳幼児の保育や教育に関する問題や、保育現

場などで直面するさまざまな課題について各

自研究テーマを設定し、ゼミ形式で話し合い

ながら研究レポートの作成^ま」を目指す授業で

ある。受講生は現職保育者のほか、元保育者

や他領域の仕事に就く者などさまざまである。

インタビューでは「現代保育課題研究」に

参加するということが履修者にとつてどのよ

うな経験であったのかについて質問した。イ

ンタビュー内容は履修者の同意を得た上でI

Cレコーダーを用い録音し、逐語録にし、修

正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ^ホ

を用い分析を行った。分析は現職保育者と元

保育者・非保育者に分けて行っており、本稿

では特に現職保育者に焦点を当て、その一部

を履修者の具体的な語りとともに紹介する。

参加動機——保育の行き詰まり——

履修者の参加動機には、自身の保育経験に

対する相反する二つの評価が共存しているこ

とがわかった。一つは、「保育の行き詰まり」

である。保育実践の中でこれまでの経験では

とらえきれない課題に直面し、行き詰まりを

感じたことが参加動機になっている。一方、

このように保育に行き詰まりを感じ、自身の

保育経験の未熟さを認識しながらも、これま

での「保育経験に対する自尊心」を持つてい

ることも明らかになった。自身の保育経験に

行き詰まりを感じながらも、同時に自尊心も

持ち合わせているということは、大人が学び

直しをする契機として重要な要素であると言

える。

そして、今回の研究で核になる部分である

のが「学ぶこと自体への欲求」である。現職

のB保育者は以下のように語っている。

B あとは経験を重ねたからこそ面白くなってきたんだと思うんですよ。学びと実践が。(略) ねばならないっていうより、何か面白いな、楽しいなっていうか、学ぶことが。

他の語りの部分でもB保育者は、養成段階の学びと比較し、自分自身の学びを振り返る語りが見られた。このように、経験を重ねることによって、依存的状态に近い養成段階や新人のころには抱くことがなかった、学びと自体の面白さを実感していることがわかる。

学びの過程

「現代保育課題研究」に参加する保育者にとって重要な学びは、授業担当者である専門家から指導を受け、保育現場では得ることができない専門的な知見を得たことである。しかし実際に学んだことは、決してそれだけでない。

い。F保育者は以下のように語っている。

F 自分が勉強できる範囲ってある程度限られているじゃないですけど、あれもこれも勉強したいんだけど、やっぱり時間的なものであったりとか、なかなか難しいところで、ちよつと海外の保育についてはあの方が詳しいから聞いてみようとか、あの方のほうが美術に関して造形に関して詳しいから聞いてみようとか、そういうパイプができたっていうのはうれしかったですね。

F保育者が「現代保育課題研究」で学んだことは、自身の行き詰まりに対する解決策だけでなく、むしろ個人の興味・関心を越えた多様な保育の専門的知見であった。従って、「現代保育課題研究」という場合は、問題解決的な学びだけでなく、より広い範囲の知見や情報を獲得できる場であったと言える。

さらに、現職の保育者であるC保育者は、

「現代保育課題研究」を受講した後の変化として次のように語っている。

C 試すっていうか、この子に合ったものは何だろうっていうのでやっていく、もちろんうまくいったことはよかったな、なんですけど、うまくいかなかったこともやってみて気付くことってあると思うので、そういったことがいろいろにやってみようってなったのはよかったのかなって思いますね。

「この子」に対するかかわりがうまくいかないことは、C保育者にとって行き詰まりと感じられるものであり、「現代保育課題研究」の参加動機にもなっていた。しかし「現代保育課題研究」における学びを通して、うまくいかなくても試してみようと感じるようになった。つまり、行き詰まりと感じていた子どもに対するかかわりの難しさを受容し、試してみようという能動的なとらえ方に変化したの

だと考えられる。

ほかにも「現代保育課題研究」における学びについて以下のように語った履修者もいる。

E 再確認じゃないですけど、普段そんなこと全然思わずにやっていることが、皆さんにアドバイスしていただけると、そうそうみたいな、保育士ってやっぱりそう考えるよなっていうことが、普段は全然思わないというか気付かないというか誰にも言われないうし、他のいろいろな現場の方がいて、でも皆保育のことを考えていて、自分の話をしたりした時にそういうふうにとらえられたこと今までないなみたいな、(略)そこはすごい面白いっていうか、本当に勉強になるというか、原点に戻れるっていうか。

「保育士ってやっぱりそう考えるよな」と表現されているように、現場とは異なるとらえ方が提示されることによって、改めて自身の

保育の原点に触れ、新たにとらえ直すことができたと考えられる。大人は蓄積された経験が豊かな学習資源となっており、経験から得られた学習に価値を置く。また経験は学習によつて影響を受けにくい特性でもある。そのため、大人の学習者は蓄積された経験により、多くの固定した思考のパターンや習癖を有しており、開放的ではない側面があるといわれている。^{注4}しかし「現代保育課題研究」においては、研究という学びを通して、日常性を客観視し、立ち止まる時間を持つことで、自身の経験を開放的にとらえていたと言える。

学ぶことと自体への欲求

「現代保育課題研究」に参加した保育者には、実践における行き詰まりに対する問題解決的な学びへの欲求だけでなく、問題解決という枠を超え、学ぶということ自体への強い欲求が存在していた。また、即時に応用可能な知

識を求めるだけではなく、研究という異質な枠組みを通して日常を客観視することで、自身の経験を再解釈し、子どもとのかかわりを改めて問い直す過程が見いだされた。

成人学習の分野では、二十世紀までの大人の学びとは、社会的役割を身につけ、変化する社会に適応するための学びであるという観点を中心位置付けていた。しかし、変化の激しい二十一世紀では大人の社会的役割が拡大し、役割そのものが必ずしも自明のものでなくなり、新しい社会的役割の創造に向けた学びが展開されるようになってきた。^{注5}本研究で見いだされた、現職保育者の学ぶこと自体への欲求や自身の保育経験をとらえ直していくような学びも、保育者としての役割に適応していくための学びではなく、役割そのものを問い直していく学びであったと考えられる。このことは、個人の力量形成や問題解決の機会とは異なる現職研修のあり方として新

たな示唆を与えてくれる。

おわりに

最後に以下の受講生の語りを紹介する。

でも本当にやっぱり仕事も好きなんですけど、仕事をすると学びたくなる、そっち（注：学ぶこと）って本当はすごい好きで。だから多分学生でいるっていうのが好きなんだろうなって思うんだよね。そういうことを許してもらってる場って私にとってはとっても幸せ。

「現代保育課題研究」の場を学びが許される場と表現したことに、私は大変驚いた。「許してもらえる」という言葉には、大人が学ぶことに対する社会の厳しい評価が見えてくる。しかしそれでも学ぶことにまっすぐに貪欲で、何よりも学ぶことを楽しんでいる「現代保育課題研究」の受講生から、人としての深い学びを教えていただいたように思う。

参考文献

- 1 中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・安見克夫「保育カンファレンスにおける談話スタイルとその規定要因」保育学研究50(1) pp.29-40 二〇一二年
- 2 お茶の水女子大学「社会人プログラム『変革期の乳幼児教育・保育を考える』」2013.8.23. 2013.8.29
http://www.ocha.ac.jp/news/h250612/poster2_1.jpg
- 3 木下康仁『グラウンデッド・セオリーの理論特性 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い』弘文堂 二〇一二年 pp.25-34
- 4 M・ノールズ『アンドラゴジーとは何か 成人教育の現代的実践―ベタゴジーからアンドラゴジーへ』堀薫夫・三輪建二監訳 鳳書房 二〇〇二年 pp.33-67
- 5 三輪建二『二十一世紀の生涯学習社会と社会教育の復権 おとなの学びを育む―生涯学習と学びあうコミュニティの創造』鳳書房 二〇〇九年 pp.32-56